

「巨峰」の露地栽培における ブドウ晩腐病の多発要因

病害虫部

1 背景、目的

福岡県ではブドウ晩腐病が 2000 年と 2001 年に「巨峰」の露地栽培で多発しましたが、その要因が不明なため、効率的な防除ができずに問題となっています。

そこで、感染源である胞子の飛散と気温と降雨の関係を解析し、本病が多発する気象条件を明らかにしました。

2 成果の内容、特徴

- 1) ブドウ晩腐病菌は、平均気温がほぼ 20 以上で降雨にあうと、越冬病斑に多量の胞子を形成しはじめ、雨滴とともに飛散します。また、越冬病斑に形成される胞子量には限度があるため、前期のような条件が連続した場合は、胞子はこの期間に集中して形成、飛散し、その後は終息します。
- 2) 上記のような降雨条件が、ブドウの幼果が晩腐病に感染しやすい5月下旬（落弁期）以前に生じた場合は、この期間に胞子は多量に飛散し、その後の感染しやすい時期の飛散量が減少するため、発病は抑制されます。（雨が多くても少発の年）
- 3) 落弁期以前の気象が少雨あるいは降雨があっても平均気温が 20 以下の場合には、越冬病斑の胞子形成は抑制され、その後の感染しやすい時期に連続降雨に遭遇すると、多量の胞子が飛散するため、発病が増加します。（多発の年）

3 主要なデータなど



写真1 ブドウ晩腐病

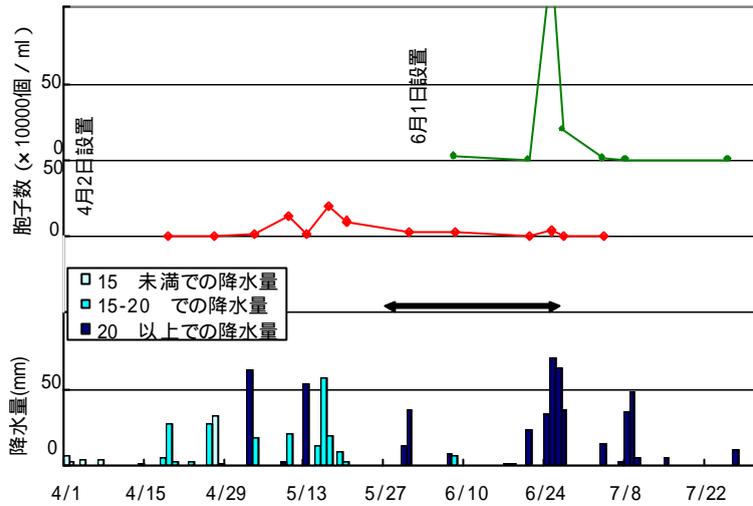


図1 ブドウ晩腐病菌分生胞子の飛散消長と気象概要(2004)

注) 胞子飛散消長は場内ほ場に罹病枝の切り枝を降雨トラップの上に設置して調査した。矢印は幼果の感染時期、落弁期から慣行の袋掛け時期まで。

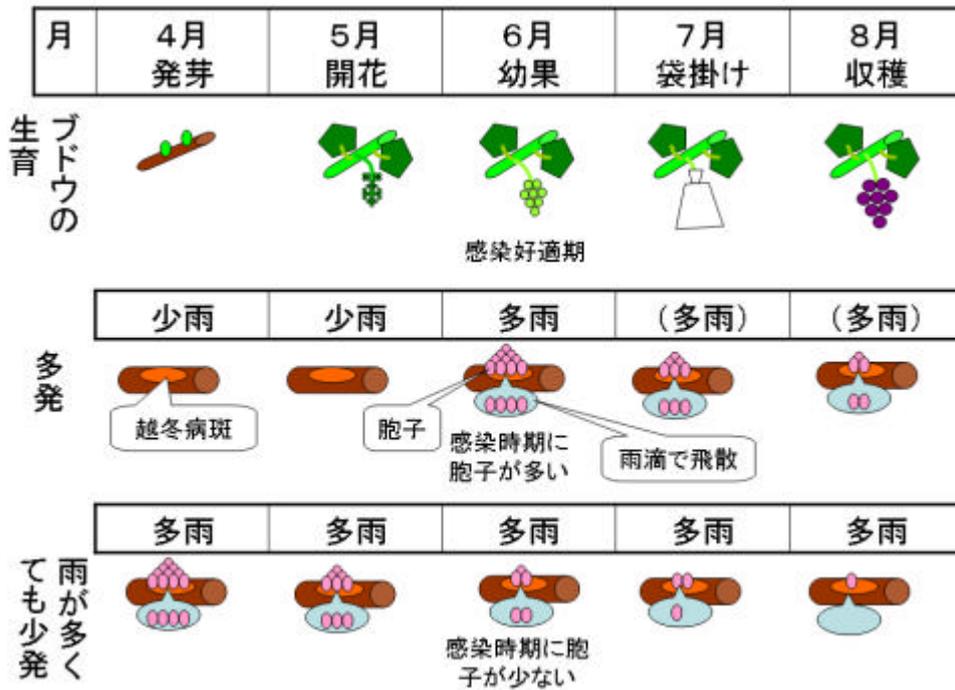


図2 降雨状況に応じた胞子飛散時期と生育状況のモデル